
東方雷電記 ~ Light to come off in a fantasy ~

パーラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方雷電記 ｝ Light to come off in
a fantasy ｝

【Nコード】

N8608T

【作者名】

パーラー

【あらすじ】

生まれたそれは、彼と同じく矛盾の塊。
生まれたそれは、彼と違う非力な人間。

「神隠しの共犯」は、今日も無意味に生きる。
これは、そんな物語。

負の第一幕：独白（前書き）

こいつは主人公じゃないですよ！

負の第一幕：独白

皆様どうも初めまして。

単刀直入で非常に申し訳ないが、

彼視点の物語を始める前に、僕の話聞いてほしいんだ。

主人公の話じゃなくて、関係者の話をね。

僕は前の世界……いわば現実世界と言うものか。

とにかく、僕という存在はその世界に生まれ、育ち、死んだと認識された。

本当は死んだんじゃないくて、この世界から消えたのだけれど。

僕がいなくなったその日は天気が激しい雷雨だったから、雷に打たれて死んだのだと思われたのだろう。

それを知った僕は、勝手に殺すなと言いたくなったね。

僕は別の世界に行っただけなのだから。

僕の唯一の友達がそうしたように、さ。

まあ、友達とは言ったけど彼が勝手に言ってるだけだね。
実際僕にとっては、いい迷惑だし。

まあとにかく、僕はその雷雨の日に、
自分が興味を持った世界に行く事にしたんだ。
理由は、暇だったから。

学生にはよくある動機だよな。

何て言ったっけ？ 殺人を犯した学生やニートが言う常套句。
『ムシャクシャしてやった。誰でも良かった。今は反省している』
だっけ？

あれって可笑しいよね。

僕なら最後の台詞に『僕は悪くない』って言えるからさ、余計に笑えちゃうんだよ。

おっと、話が逸れたね。

まあとにかく、僕は暇だからと理由だけでその世界に行こうとしたんだよ。

その所為で死んだ扱いなんだから酷いよね。

僕は何も悪い事をしていないのに。

で、その世界に言ったはいいのだけれど、
浮かれていた所為で本当に雷に打たれたんだよ。
そしてその所為で気絶したのさ。

まさか向こうの世界まで天気が雷雨だとは思わなくてさ、一瞬で気絶しちゃったんだよ。

忌まわしい事この上ないね。

でも、それで良かったのかもしれない。
今思い出せば、そう感じてしまうよ。

そんな中で、僕の救世主が僕の中で生まれたのだから。
僕とは全く違い、それでも僕である彼が。

さて、語りたい事も済んだ。

僕はしばしの間傍観に徹し、物語は彼にバトンタッチするとう。

継ぎ接ぎで、矛盾だらけな。

僕と同じ醜さと、僕には無い美点を兼ねる。

あの男に。

第一幕：始まりはいつも理不尽に（前書き）

はい、これが本編。

第一幕：始まりはいつも理不尽に

目が覚めると、俺は地面に倒れていた。

「……………」

ここは、何処だ。

目の前には紅葉一杯の木。土砂降りの雨。
自然しかない、幻想のような景色。

でもそんな景色も、この状況では観賞する心の余裕は無かった。

「……寒いな」

とりあえず起き上がり、雨に打たれない場所を探す為に森を歩く。
本当は走りたいところだが、足下がグチャグチャだ。
走ったらすぐさま転んでしまうだろう。

ぐしょ濡れの髪や身体の水を精一杯手で掃う。
全く酷い雨だ、一体何時から降り出したんだろう。

「あ、そういえば今何時だ？」

時計を見る為に左袖を捲る。

しかし、時計はその機能を果たしていない。

「秒針が止まってる……」

いや、それ以前にガラス部分が割れている。

「何かあったっけ……」

そつえば何で俺はあそこで倒れていた？
そもそも、俺の名前は？

「……思い、出せない？」

……本当に何があった？
俺は思い出そうと頭を抑える。

「……あ」

そして、ひとつの情景が頭に浮かんだ。
それと同時に、遠くで雷が落ちる。

「……！」

その瞬間、ただ己の衝動に身を任せて走りだした。
転んでは立ち上がり、また走り出す。

「馬鹿な……！」

その浮かんだ情景は、自分が雷に打たれ死んだ姿。

「違う、気が狂ったんだ……！」

雷なんかには撃たれたら生きてる訳が無いし、仮に生きていたとしても全身大火傷だ。
絶対に違うはず。

「でも、でも……！」

だったら何で、記憶がない？

ここは何処だ？

俺は誰だ？

なんでここにいます？

俺に何があった？

疑問に対する答えは、全く出てこない。

その事実が、更に俺の恐怖を加速させる。

「記憶喪失……！」

ふと、そんな言葉が頭に浮かんだ。

それがまるで自分が死んだ証拠のように思えて、更に鳥肌が立ってしまう。

嫌だ。

認めない。

認めたくない。

「夢だ、夢なんだ……！」

口ではそう言う物の、身体がそれを拒否する。

あの夢独特の浮遊感が感じられない。

転んだら、痛みがある。

「違う違う違う違う違う違う違う違う！」

それでもまだ信じたくなくて、『これは夢だ』と自分に言い聞かせる。

言い聞かせれば、本当にそうなると思っっているかのように。

「夢だ、妄想だ、幻だ、嘘だ……！」

何も考えず、否定するための言葉を呟き続ける。
そうしていく内に、今度は雷が近くに落ちる。

「……！」

そんな雷を見て、もう一度脳裏に浮かんだイメージ。

事実と思うには非現実的過ぎて、夢と思うには現実的過ぎた光景。

雷に打たれて、あの場所に倒れた自分の姿。

何度も現れる鮮明なイメージは、俺を諦めさせるには十分だった。

「そうか……俺は、死んだのか……」

どうしようもなく認めるしか無く、
乾いた笑いが口から漏れた。

「……これからどうしよう」

死んだ事実を強制的に植え付けられた俺は、
何をするでもなくただ俯いていた。

雷雨は、その勢いを強くする。

「生き返らなきゃ良かった……」

溜息が自然と出てしまう。

未だにこれが夢だったらと切実に思う。
いつそ死んで、楽になりたい。

「じゃあ、食べさせて」

そんな声が聞こえた時には、右腕一つ持ってかかっていた。

第一幕：始まりはいつも理不尽に（後書き）

再々改訂とか巫山戯てますよね。
ごめんなさい。

もう改訂はしません。
ご安心ください。

誤字脱字のご指摘お願いします。

第二幕：恩人はネコ科

「じゃあ、食べさせて」

そんな声が聞こえた途端、右腕が喰われる。
あまりにも突拍子な出来事に思考が追いつかない。

「……っ！」

そして、やっと理解した。

腕をもぎ取られるなんて経験がない俺には、
この突然の痛みを表現する術を知らない。
まるで機械の警告音の様に、『痛い』という感情が頭に鳴り響く。

「あっ……ひっ……くあっ……！」

まともに喋れない。
まともに動けない。

「いただきます」

最後に聞いた声は、死んだ命に感謝する言葉。
では無く。

「橙！」

「了解です！」

俺に救いの言葉と認識させる、知らない二人の声だった。

「……夢？」

目覚めると、布団の中にいた。

「そうだ、右腕は……？」

飛び起きて、肩から下へ撫でる様に確認する。
二の腕が、肘が、指がある。
右腕は、確かに俺の体に繋がっていた。

「……変な夢だったな」

立ち上がって周囲を見る。

周囲には床の間と、煎餅の置いてあるちゃぶ台しかない。

「……何処までが夢なんだろう？」

妖怪だとか右腕の消失とかは、あまりにも非現実的だから夢だ。
じゃあ、自分の名前やそれ以前の記憶は？

……やっぱり、思い出せない。

「記憶喪失なのは間違いないのか……」

振り出しに戻っただけ、か。

俺は溜息をついた。

それにしても、ここは何処だろうか？

民家なのは間違いないが、えらく古風だ。

「……状況がわからねえな」

まあなにせよ、動かない事には何も変わらない。

「襖は……そこか」

若干痛む体を引きずって

「すみません、誰かいますか？」

と、襖をスライドした。

するとどうだろう。

目の前で猫耳の少女と、九尾風の尻尾のついた女性が。

「「あ」」

着替えていた。

「「めんなさい」」

反射なんてレベルではない速度で襖を閉める。
刺すような視線が、襖越しに感じられる。

「……少々待っていてくれ」

襖の向こうから……声から想像して九尾風の女性の声がそう言う。

「はい」

俺は迷わずそう答えた。

しばしの間、沈黙が空間を支配する。

やがて向こう側から物音が聞こえ出した。

……やばい。

衣擦れの音が脳に響くようだ。

女性二人が、襖越しに男がいるにも関わらず服を着替えている。
そんな異質な環境が、深い背徳感が俺の心を支配する。

（駄目駄目駄目駄目、変な事考えたら絶対駄目だ）

そう思っても、心臓が収まらない。

（……かくなる上は！）

「もういいぞ……って何をしている！」

私が襖を開けて最初に見たのは、
額を血まみれにして柱に頭をぶつけている修羅だった。

「煩惱の抑制です」

彼は涼しげな顔でそう言った。

俺は額の傷を治癒して貰い、現状の説明を彼女からしてもらった。
治癒に術を使ったところを見ると、
右腕も本当は外れていて術で治癒してもらったという可能性が出てきた。

……尻尾がある事といい、術を使える事といい、
どうやら俺は現在、非日常的空間に居るって事だ。

「待たせたな」

噂をすれば、九尾の女性が居間に入ってきた。
手には、煎餅と緑茶を乗せたお盆がある。

「いえ、そんなに待つてはいませんよ」

嘘だ。

実はさつきからずっと落ち着かずにソワソワしている。
実際の時間は解らないが、
体感時間的には結構待っているつもりだったりする。

「そうか」

九尾の女性はお盆を置いて座り、気さくな笑みをこちらに向けた。

「まずは自己紹介から始めようか。
私の名前は八雲藍。この幻想郷の管理者の式神をやっている」

八雲藍さんか……。

「えっと、俺の名前なんです……」

「聞いてるよ、■■■だろ？」

「え？」

今彼女、何て言った？

「すみません、今なんと仰られたのか聞き取れなかったのですが……」

……

「ん？ ■■■と言ったが？」

……一部、全く聞こえない。

会話の流れからして、それが俺の名前なのだろうけど……。

「……すみません。俺の名前の部分が聞き取れないです」

何て言うか、脳が聞く事を拒否しているような感覚だ。
理由が解らないだけに、少し怖い。

「そうか。一体どうしたのだろうな……」

藍さんが思案顔になる。

考えてくれるのはありがたいが、

当事者本人にも解らない事に答えを出す事は不可能だろう。

いつかは解ると考えた俺は、話をそらした。

「で、その……幻想郷って何ですか？」

先ほど藍さんから出てきた単語について説明を要求する。
俺のかすかな知識を信じるなら、

そんな地名は世界の何処にも実在していないはずだ。

だって、『幻想』郷だぜ？

そんな地名、一度聞いたら忘れませんよ？

「哀れにも人々から忘れられた物の集まる場所だ。

君がいた世界からは隔離された世界だよ」

「隔離……別世界って事ですか？」

「そうだ」

心の何処かであればただのコスプレだと信じていたが、
どうやらその可能性は皆無のようだ。

「そうだ。私達のように人型の妖怪も数多くいるが、

大半は君……大抵の人が知ってるような妖怪だろう」

藍さん曰く、人型は比較的理性が高くて実力者クラスになると滅多
に人を襲わないらしい。

「あれ？ でも先ほどの女の子も妖怪なんですよね？」

「ルーミアの事か？ あいつはいつも人間を食べる事しか考えてな
いから仕方ないぞ？

だいたい、私や橙だって人を食べた事くらいある」

藍さんの台詞に、背筋が凍る。

俺のそんな様子を見た藍さんは失言だったと思ったのか、君は取っ
て喰わないと弁解した。

やっぱり、目の前の人も妖怪なんだよね。

常識人でもあるけど、それ以前に妖怪なんだよね。

「いくら人型でも、人間を食事的に食べる事はあるからな。ルーミアに理性がない訳ではないぞ?」

藍さんが話をまとめようと口を動かす。

どう考えても、空気に耐えられないのだろう。

俺は藍さんに気を遣って、話題を変えた。

「幻想郷と妖怪の事については解りました。

では、何故俺は今、この幻想郷にいるのでしょうか?」

聞いてみたはいいものの、実はおおよその検討はついている。

『哀れにも人々から忘れられた物の集まる場所』

藍さんは確か、そう言った。

「それは、君が周囲から忘れ去られたからだ。

幻想郷には忘れ去られた物や人が集まる特殊な結界がある。

ちなみのその結界は私の主が……いや、この説明は不必要だな」

……やはりか。

「つまり俺は、忘れられた存在という訳ですね」

「ああ、そうなるな」

藍さんは俺の言葉に同意した。

自分ですら自分の事を忘れてるからな。
他人が覚えている訳がない。

「他になにか質問はあるかな？」

「いいえ、ありません。どうもありがとうございました」

説明が終わったので、一礼する。

おかげで現状を正確に理解出来た。

「役に立てて嬉しいよ」

藍さんは湯飲みをお盆に乗せながら言った。

「一応聞くが、外の世界に戻りたいか？」

「いえ、別に」

俺は迷わず答える。

「帰っても、記憶が無いんですよ」

どこに住んでいて、どんな家族がいて、自分がどういう人間だったのか。

そういう記憶が、全く無い。

「だったら俺は、ここに住みます」

それしか、方法が思いつかない。

「そうか……。では、君には身を守る手段はあるかな？」
「はい？」

「幻想郷で生き残るには、身を守る手段は必要不可欠だぞ？」

そう言われて、俺は襲われた事を鮮明に思い出す。

今はもう身体の震えはないが、出来れば何度も思い出したいくない記憶だ。

それにしても、身を守る手段が……。

「逃げ足なら速いですよ」

「ルーミアの存在に気付かないんじゃ意味が無い。半日で食われるぞ」

「……………」

返す言葉もない。

「つまり、戦闘手段は無いってことか」

藍さんがため息をつく。

「せめてスペルカードが使えればな……」

「スペルカード？」

またしても聞き慣れない単語だ。

俺は純粹に疑問に思い、藍に聞いてみた。

「何ですか？ そのスペルカードって」

「幻想郷での決闘で使う札の事だ。これを媒介に弾幕を放つ」

弾幕……飛び道具か？

「人間で使える奴は少ないが、君なら使えるだろう」

「え？ 何ですか？」

「君は素質十分な霊力がある」

「霊力？」

また知らない単語だ。

いつぺんにそんなに覚えられないぞ。

「まあ、原料みたいなものだ」

「は、はあ……」

あれか、車で言うところガソリン的な物が。

「その霊力つてもものの素質はあっても、どう使えばいいか何て解りませんよ？」

「なら、私が教えよう」

……は？

「どうせ行く当てもないんだろう？ だったらここに泊まるといい。その間に力をつければ問題あるまい。」

そうと決まれば、早速紫様の許可を取りに行くよ。君はここで待っていてくれ」

藍さんは自分の主人——紫さんを探しに迷い家から出て行った。

「……なんか、急展開だな」

俺は庭の景色を見ながら、そう呟いた。

第二幕：恩人はネコ科（後書き）

誤字脱字のご指摘お願いします。

第三幕：幻想郷の賢者（前書き）

■ ■ ■ の中身はいずれわかりますよー。

第三幕：幻想郷の賢者

藍さんが紫さんとやらを呼びに行つて、数分が経過した。
その間、俺が何をしていたかと言つと……。

トイレを探していた。

「漏れる……漏れちゃう……！」

無事に辿り着いた時には、もう漏れそうだった。

「ま、間に合え……」

急いでトイレのドアを開け、便座に座る。

「お、ほおお……」

用を足すと、一気に緊張が解けた。

一段落ついたところで、俺は立ち上がる。

不意に、窓の向こうの空を見る。

「まだ夜になってないな……」

もう四時間経過しているかと思つたのに。
自身の体内時計の精度を疑った。

そんな事を思いながら、俺は手洗いの蛇口を捻る。

「あ、水がキンキンに冷えてる……」

手を洗う為の蛇口の水は、井戸から汲んだ水だろうか。
幻想郷は、どこか田舎のような雰囲気がある。

「これも忘れ去られたって事なのか……？」

外の世界が、自然を忘れたという事なのか。

「だとすれば、もったいないよな……」

俺はそう言いながら、手洗いの鏡を見る。

「あ、そういえば鏡を見るのは死んでから初めてだな」

つまり、自分の顔を見るのは初めてという事だ。

自分がどんな顔だったかの記憶すらないというのは、あまりにも記憶が欠落している。

最初からそれだけの記憶しかないとも錯覚してしまう程だ。

「ええっと……」

自分の顔を凝視する。

深緑の髪、黄緑色の瞳、イケメン率40%。
まったくもって、知らない顔だった。

「……アニメかよ」

髪の色が緑だなんて、二次元の産物だと思ってた。

「まあ、非現実なここじゃあそれもお似合いか」

俺はそう呟いて、居間に戻ろうとした。

「そうだ、ついでに煎餅の補充をしよう」

そんな図々しい事を考えながら。

待つ為だし、いいよね。

たぶん。

「まさかあんな所に放ってあるなんてな……」

おれは煎餅と共にある物を学ランのポケットに仕舞い、居間まで歩く。

「あれ？ ■さん？」

「ああ、橙さん」

居間へ向かう廊下の途中で、橙さんに会った。
俺は動揺を隠して質問をした。

「藍さんはまだ来てない？」

「うん、もう少し見つけるのが遅くなるって」

橙さんはそう言って、居間への襖を開ける。

「それまで、ここで待っててだつて」

橙さんは居間の床に寝転んだ。

そうか。今ここにいるのは俺と橙さんだけなのか。
なんだ、気がつかなかったよ。

.....。

あれ、犯罪臭がするぞ？

「..... ねえ、本当にあんたの名前は ■ ■ ■ なんだよね？」
「え？」

俺は橙さんの言葉が良く聞き取れず、聞き返してしまう。
..... やはり、名前のところが聞こえないな。

「ごめん。もう一度言ってくれるかな？」
「あんたの名前は ■ なんですしょ？」
「..... ごめん。やっぱり聞こえない」

何度やっても、同じだった。

「連呼してみて」
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」
「伸ばしてみて」
「■■■ ~ ■■■」
「うん、わかんない」

ごめんよ。

「むう、意地悪するなよお」

「ごめんごめん」

しかし、名前か。

なんで名前だけ聞き取れないんだろう。

原因は……雷？

「……おい、■？」

どうも情報が少ないと考えが安直になるな。
うーむ。

「おい……」

ふむ。

考えても無駄だろうな。

「返事しにやさいよ！」

ガリツと新鮮な音。

鼻が凄くヒリヒリする。

「痛い！ いきなり何すんだ！」

「何すんだじゃにやい！ 返事しないのが悪いんだ！」

「だから名前が聞こえないのに返事なんか出来ないっての！」

嘘じゃない、本当だ。

っていうか ■ ■ ■ が俺の名前であることすら疑わしい。

「噓つき！ あんたなんてこうだ！」

ガブツと凄惨な音。

腕が半分飲まれている。

「わあああ！？ 食べるな食べるな！」

必要以上に腕を振り回す。

人間と妖怪の腕力じゃ、噛まれた手を振りほどくのは至難の業だ。

「痛い痛い！ 離せマジ離せ！」

見た目幼女とマジ喧嘩する男子高校生。

犯人が自分じゃなかったら通報している。

どうやら食べられる事にトラウマが出来てしまったようだ。

まあ当然か。

「……はっ！ そうだ！」

俺は半分噛まれてる自分の腕を使い、橙さんの喉を指で弄る。

「っ！ ゴホッゴホッ」

すると橙さんは、苦しさのあまり口を開く。

俺はその隙を見逃さず、手を引っこ抜いた。

「痛い……血が出てる……」

今度のこれはさすがに幻覚じゃなかった。

さつき俺が行ったのは、犬に噛まれた時の対処法だ。

犬に腕を噛まれた時、慌てて腕を引っ張ってしまうと噛む力を強くされてなかなか振り払えないらしい。

しかし、逆に喉目掛けて手を突っ込んだらどうだろう？

答えは、咳をする。

犬に限った話ではなく、生命は異物が喉に入った時に咳をする防衛本能がある。

それを強制的に起こさせる事で、噛まれた手を外すという技だ。

今回は咳をさせれば解決出来ると判断したので、喉を弄るという方法で極力穏便に済ませようとした。

「でもさすがに、女の子が咳で苦しませるのはアウトかな……」

いくら身を守る為とはいえ、さすがにやり過ぎた気がする。
ビジュアル的にNGだ。

「だ、大丈夫ですかっつうおお!？」
「ぎにゃー!」

俺が近付いた途端、鋭く尖った爪と牙を構えて飛びかかってくる橙さん。

首に、数本の切り傷が出来る。

「ああもう！ 心配して損した!」

こうなりや徹底的にやってやる!

「こい！ 化け猫!」

「ふしゃあああああ!」

結局藍さんが帰ってくるまで、命がけの喧嘩は続いた。
でもなんで一方的に怒られたんだろっ……。

「橙のことは謝りますから、機嫌直してくださいよ」

迷い家から離れ、博麗神社に向かう俺と藍さんと橙。
俺はあれからずっと、半泣きで藍さんにすがりついている。

「いくら妖怪とはいえ見た目は子供だろう！
まさか暴行を行ってるとは夢にも思わなかったわ！」

ようやく口を開いた藍さんは般若のようだった。
いや、般若の方がまだ救いがある。

「反省してます」

その睨むだけで鬼すら殺せるような顔を見ると、これしか言えなくなってしまう。

「反省してます」

どうにか許して貰おうと必死で謝る。
俺が土下座をしようとしたところで、藍さんは許してくれた。

「私より橙に謝れ。半泣きだぞ」

……藍さん二言目にはいつも橙さんですね。

猫可愛がりとはまさにこのこと。

「……ごめんよ、橙さん」

誠意を込めて腰を曲げる。

でも、腕を食べるのはNGだと思うんだ。

「ふん、許してあげてもいいけど」

「……ありがとう」

思わず笑顔を作る。

「ただし、あたしの事は橙様って呼びなさい」

「……わかりました」

ここで反論しようものなら、猫と狐のダブル弾幕で命を奪われかねないと判断し、

俺は素直に頷いた。橙さん……橙様は凄く満足そうだ。

「君が式になったら、橙の下だな」

「は、ははは……」

正直、前途多難だと思った。

それから藍さんと橙と話ながら歩き、彼女達が妖怪である事を忘れて仲良くなった。

俺はその事実、心の底から安心した。

「さて、着いたぞ」

「もうですか、早いです……ね……」

俺は絶句した。

着いたという割には、目の前には神社らしき物は無かったからだ。代わりに、えらく長い階段が目の前を支配する。その向こうには、鳥居がギリギリ見えた。

「さすがに君にこの階段は無理かな？」

「じ、自力で上れますよ！」

俺はそう言っ、二段飛ばしで駆け上がった。

「あ、こら！ 危ないぞ！」

「転んだりしませんから安心してください！」

俺は更に三段飛ばしにして、ペースアップをする。

「そうじゃなくてだな！」

「神社の何が危ないって言っんですか！」

まさか妖怪が現れる訳でもあるまいし。

「グオアアアアア！」

「！？」

突如、階段の横からとても大きな物体が現れた。これ……妖怪！？

「嘘だろ……？ 何で神社に妖怪がいるんだよ！」

「まったく……忠告を聞かないからだ。」

ついでにそいつはただの熊だ」

すぐ後ろには、藍さんがいた。

藍さんは俺を橙様の所に投げたと思うと、大熊を拳一つで吹き飛ばした。

「つ、強い……」

吹き飛ばされた大熊は、泣いて逃げていった。

あの細い腕の何処に、そんな力があるのだろうか？

「ふう、こんな程度か」

藍さんはそう言い、こちらまで優雅な足取りで戻ってきた。

「大馬鹿物！」

「のばらっ!？」

そして、俺に拳を放った。

ご丁寧に、鳩尾である。

「何故……」

「調子に乗るからだ！　ちゃんと言う事を聞け！」

いや、だからって神社に野生の熊がいるとは普通思わないでしょう

……？

常識的に考えてさあ。

「幻想郷で外の世界の常識が通用すると思うな！」

そう言われると、返す言葉もなかった。

まあ、妖怪がいる時点でアウトだね。常識なんて。

「ほら、さっさと歩け。時間が無いぞ」

あれから数分、とうとう階段を上りきる事が出来た。

「ここが博麗神社だ」

「……もう説明はいいので、紫さんに会わせてください」

息が切れて、呼吸する度に血の味がしてしょうがない。
何か飲むものがほしい。

「随分とせっかちだな。いずれ早死にするぞ」

「妖怪に比べたら人間なんて全員早死にするように」

妖怪が馬鹿みたいに長命な事くらい、俺だって知ってるぞ。
俺がそう言つと、藍さんは微笑みながらこう言った。

「そう返されると言い返せないな。博麗の巫女は……いないな、好都合だ」

「居ると困るんですか？」

「君とは性格が合わないそうだ」

「はぁ……」

どんな性格なんだろう。

それに、巫女か……。

「なんでもありだな」

「外来人はよくそう言うよ」

藍さんの声。

「では、主人を呼ぶとしますか」

「……………」

「そんな緊張しなくていいさ。紫様は基本優しいから」

主を呼ぶと言った瞬間の橙様を見た俺には、そう緊張するなという方が難しい。

優しいという主の主に震えるか？ 俺にはそうは思えない。

「……橙様、なんでそんなに震えてるのですか？」

「……紫様が来ればわかる」

「？」

登場の仕方が変なのか？

そう言えば紫さんってどんな妖怪なんだろう。

登場の仕方が変な妖怪……。

駄目だ、思いつかない。つか知らん。

若干不安な二人をよそに、藍さんは空に向かって何かをなぞるように指を動かした。

「……藍さんは何をしているんだ？」

「結界の調整だと思う」

……紫さんってのは結界の中にいるのか？

「ちょっと藍？ その結界はもう少し緩めにしなさいといつも言

「つてるでしょ？」

不意に後ろから声が聞こえる。

その瞬間、待つてましたと言わんばかりの速度で藍さんがこちらを向く。

「紫様、■■■を連れて参りました」
「へ？」

振り返ると、真後ろに。

「あら？ あなたが■■■ね？」

妖艶で、見透かすような微笑みの。

「ようこそ、幻想郷へ」

傘を差した女性がいた。

第四幕：程度の能力

最初に感じたのは、不信任感。
その扇子で隠した微笑みに。

次に思ったのは、胡散臭さ。
髪を触る、扇子を開くなどの、ちょっとした仕草の二つ二つに。

最後に覚えたのは、恐怖。
常に心の底を見透かされるような視線に。

その一つ一つに、
全身の毛が震えるような悪寒を感じた。

「ど、どうも初めまして」

辛うじて口を開く。
なるほど、橙様が怯える訳だ。警戒心MAXで喋ってしまっ

そうでもない、不安ではない。

「ふふ、そう警戒しなくていいのよ」

優しく微笑む紫さん。
やはり、見抜かれてる。

「立ち話もあれだし、神社に入りましょう」

「藍、結界を弄ったのは何故かしら？」

「いくら起こしても起きないからです」

「少々、いえ、かなり強引よ」

「すみません。ですが、紫様を起こす手段を出し尽くした後だったんですよ？」

「……勝手に弄られても困るから、もう少し生活環境を整えてみるわ」

「助かります」

藍さんと紫さんの会話。

俺の事なんて全く話していないのに、何故かこちらを見られているような感覚がある。

「ところで、本当に彼は■■■なのかしら？」

「え？　どういう事ですか？」

会話の内容の一部が聞こえる。

あれ？　もしかして人違い？

「本物の彼なら、ルーミアぐらい簡単に屈服させられる力はあるはずよ？」

「そ、そうなんですか……。ですが、彼は記憶喪失らしいんですよ」

「記憶喪失で髪の色まで変わるかしらねえ？」

「……………」

なんか、凄く怖い話が聞こえる。

記憶喪失前は、紫さんと知り合い？

……………怖すぎる。

「まあいいわ」

よくない。

「ここでいいかしら。霊夢がないけどどうかしたのかしら？」

「食料の買い出しだと思います」

藍さんはそう言いながら、部屋にあった茶葉と煎餅を取り出した。

……ここって人の家だよね？

なんで緑茶の葉の位置を知ってるの？

なんで煎餅の位置を知ってるの？

「それで？ 彼は私に何の話があるのかしら？」

紫さんがこちらを向いて問いかける。

俺は内心びくびくしながらも、こう切り出した。

「あの、お願いがあるのですが……」

「なるほど、藍を師匠にねえ」

お茶を啜る紫さん。煎餅を囓る藍さん。

藍さんの尻尾に蹲る橙様。未だ緊張の解けない俺。

空気がおいしいはずの山の神社の中で、俺にだけ居心地の悪い空気を与えられている。

「あの……駄目でしょうか」

恐る恐る聞く。

「駄目駄目よ」

しかし、即答されてしまった。

「妖怪でもないあなたを弟子にする理由がないわ」

そう言っただけまたお茶を啜る。顔は心なしか険しい。

俺は紫さんを説得出来るかどうか、藍さんにアイコンタクトを取る。

「……………」

……駄目ですか。

そんな顔されちゃあ、頷くしかないよな。

「……わかりました」

「そつ、わかったならいいのよ」

心底どうでもよさそうな顔で話す紫さん。

お茶を飲みきったら扇子を持ち出し、空間に線を描いた。

描いた場所から、端にリボンが結ばれた隙間の様な物が開く。

「もう遅いし、私は帰るわ。藍、後はよろしく」

そしてそのまま隙間に入り、消えていった。

今神社にいるのは藍さんと橙様、俺だけだ。

「……すまないな■君」

「あ、いえ。こちらが無理を言っただけで仕方ないですよ」

まあ結構残念だけど、駄目なら仕方ないから。

まあ、あれがあるし今日はなんとかなるだろう。

「他に身を守る手段はありますか？」

俺がそう言つと、藍さんは思案する。

こういう所は主人さんとは違うね。

「そうだな……武器とかはどうだ？」

「無いよかマシですね」

他にいい案もないので提案に乗ることにした。

でも上手く扱えるかなあ……。

あの武器。

「武器なら人里だな……時間も時間だ、明日にするかい？」

「いえ、これ以上お世話になる訳にはいかないので遠慮しておきます」

「また妖怪に襲われるぞ？」

「いえ、大丈夫です」

つていうか紫さんの家に泊まりたくない。

藍さんの家、つまり紫さんの家だ。

絶対にバレル。

「道筋はわかるかい？」

「道中通ったんでわかります」

「そうか……気をつけてな」

「ありがとうございます。では」

月が照らす真夜中、藍さんに見送られて俺は神社から立ち去った。

「……彼は、外の世界で生きるのは能力が強すぎる」

だから、ここに逃げてきたはず。
全てを受け入れる、幻想郷へ。

「でも、そこにいたのはまるっきり別人の彼……」

おそらく作ったか……。

ここに来てすぐに作ったような意志が、まともな人格を持つてゐるはずがないだろう。

同じだけど、同じじゃない。

「厄介ね……」

今すぐここで消すか、様子を見るか。

「……これから次第ね」

私は紅い札を握りしめ、スキマからじつと彼を見つめていた。

「……暗い」

人里までの道中、青白かった月明かりが見えなくなった。
今となつては、一寸先も見えない。

「一寸先は闇。……闇か」

……そこにきつという。

俺を喰おうと待ち構えてる。

「……出てこいよ、もう逃げないから」

俺が促すと、辺りの闇が収縮した。

そしてそこから、見覚えのある金髪の少女が現れる。

「やっぱりお前か、ルーミア」

「……………」

返事は無い。

でも、背中から生えた翼から禍々しい程の暗闇が自己主張をしている。

呪詛、怨念。

それが一番わかりやすい例えだ。

「あいにく、今度はただでは喰われないぜ」

「……………」

やはり返事は無い。

でもルーミアの眼を見れば、言いたい事はわかってしまう。

殺してやる。

食べてやる。

腹の底から沸いて出る負の感情。
でもそんなのは紫さんに比べたら生やさしい物だった。

上を知るという事は、何て励まされる事だろう。
だから、前を見据えられる。

「藍さん、ごめんな」

俺はポケットから一つの身を守る手段を取り出す。
三枚のカード。
武器。

俺は生き返り、生まれ変わった。
そして一日で多くを学んだ。
結果、目標が出てきた。
だのに、こんな所で死ぬ訳にはいかない。

「ちょっと拝借しますよ」

それは俺なりに考えだした答え。
武器、彼女はそう言った。
剣、槍、銃、拳。

普通の人間ならこれらを想像するだろう。
でもここは幻想郷。

「ルーミア、弾幕決闘だ」

武器はそう、スペルカードだ。

「橙、ここに置いてあったスペルカードを知らないか？」

深夜、一眠りした私は橙に訪ねる。

台所に置いておいたスペルカードが見あたらないのだ。

橙は不思議そうな顔をして答える。

「机の上のケースには無いんですか？」

「ああ、無いんだよ」

紫様を捜す時に外したつきり、全然見あたらない。

「居間は探しました？」

「いや、置いた覚えがないからな」

「■と話してる時に、気付かない内に落ちたのでは？」

「ああ、それも考えられるな」

なんだかんだ言って、結構あたふたしたからな。

何かの拍子に落ちていても仕方があるまい。

「最近の橙は凄いな。これなら八雲の名を貰うのも時間の問題だな」

「へへへ」

蕩けるような顔になる橙。

その笑顔を見ると、私も蕩けそうになってしまう。

「いや、いかんいかん。橙、居間を調べてくれないか？」

「了解です」

橙はダッシュで居間に向かった。
その速さや判断能力に、本当に優秀になったと実感する。
感慨に耽っていると、橙が戻ってきた。

「藍しゃま！ 床に落ちてました！」

「そうか。ありがとう、橙」

「どういたしまして、藍しゃま」

輝くような笑顔を見せる橙。

そして、居間に戻っていった。

私は我慢していた鼻血が出そうになるのを堪えて、受け取ったケースを確認する。

「まったく、何の拍子で落ちたんだか……」

ケースを取り出し中身を確認する。

そして、違和感を感じた。

カードの並び順が狂っており、スペルカードが三枚欠けているのだ。

「……橙、橙！」

私の声を再度呼び出す。

「お呼びでしょうか藍しゃま」

「台所に■■■は入ったか！？」

「いえ、彼はトイレに行っただくらいで詳しい動きは……」

「目を離したんだな！？」

「こ、ごめんなさい……」

居間に落ちていたのは、そういう事だったのか！

■の奴、スペルカードを盗んでいった！

「……だからどうしたんだ？」

正直、カードは宣言する合図の様なものだから技だけはすぐにも出せる。

（本物の彼なら、ルーミアぐらい簡単に屈服させられる力はあるはずよ？）

紫様の言葉を思い出す。

「……まさかな」

何度も何度も使ったスペルカードだ。
名残が残っていても不思議は無い……。

「……助けに行く、橙は待ってる」

「夜符『ナイトバード』」

「式神『仙狐思念』」

激しい弾幕同士のぶつかりあい。

それにしてもスペルカードが体力を消耗させるとは思わなかった。
ただのアイテムだと思っていたのに。

「……本当、藍さんには悪い事してるなあ……」

後でたつぷり怒られよう。

そのためにも。

「こいつを倒さなくちゃな」

もう一枚のスペルカードを宣言する。

「式弾『アルティメットブディスト』」

俺を中心に現れる卅のレーザー。

「ほらほらあ！ 回れ回れ回れえ！」

大声で挑発する。

でも体力は結構限界だ。

声でも出してないと、何時倒れるかわからない。

「ハハハア！ 潰れるお！」

冷静に見るとけっこう凶悪だな俺。

こんなキャラじゃないのに。

……俺のキャラって何だ？

俺は自分のキャラを知ってるような奴か？

「月符『ムーンライトレイ』」

「……っ！　しまっ！」

弾幕の薄い場所にルーミアのピンポイントな攻撃が迫る。
避け……きれないっ！

「……っ！？」

周囲の地面に無数の穴ぼこが出来上がる。

が、俺には、一発も被弾していない。

（何だ、今の感覚……）

避けきれないと感じたはずなのに、身体が勝手に動いて避けてくれた。

ほとんど操られて動かされたのと同じだ。

（まあ、助かったからいいか）

そんな事を考えていると、更に弾幕が振ってくる。
真っ赤で真っ黒で、禍々しい。

それすらも、勝手に身体が避けてくれる。

（いまスペルカードを発動すれば……！）

俺はこれを好機と考え、最後のスペルカードを準備する。
しかし、それがまずかった。

「……ガハッ！」

血を吐き出す。

霊力の無茶な酷使で、早くも限界が訪れたようだ。

「闇符『ダークサイドオブムーン』」

そんな俺に対して、ルーミアは容赦なく新しいスペルカードを放つ。

「幻神……『飯綱権現降臨』」

無い筈の力を振り絞って宣言する。

俺の持つてる、最後の一枚。泣いても笑ってもこれが最後。勝負が、決まる。

「……終わらせるぜ、ルーミア」

「あれは……？」

人里と博麗神社を結ぶ道の真ん中。

そこには見覚えのある弾幕が輝いていた。

あれは飯綱権現降臨。

「大丈夫と言った癖に……！」

既に、手遅れかもしれない。

「間に合ってくれ……！」

「くっ……耐えろ、耐えてくれ」

弾幕同士のぶつかり合い。

こちらの体力はもう限界を越えている。

それでも弾幕の維持が出来るのは本来の持ち主の強さのおかげだろう。

だがルーミアのそれは確実に迫ってきている。

弾幕の美しさで決める勝負のはずなのに、既にそれは殺し合いの領域だった。

鬼気迫る闇が、今まさに俺の命を刈り取ろうとする。

「……………」

ルーミアは何も言わず、ただただ凄惨な笑みを向けるだけ。

「あと少し、耐えて……」

無茶な行動を起こした罰なのか。

もしかしたら雷に打たれた時点で、罰は始まっていたのかもしれない。

生きたいという虚しい願いは叶わず。

俺の弾幕が、途切れ……

「■！ 逃げろ！」

藍さんの声が聞こえた気がした。

……ごめん、間に合わないよ。
説教が聞けなくて、ご免な。

闇の弾幕は、今にも頭を貫こうとしていた。

……時間が止まったようだ。

目前に迫った弾幕の動きが鈍く感じる。
俺自身の動きも、何もかも。

「名も無き哀れな者よ」

急に響く声。

誰の声かはわからない。

お前は、誰だ？

「一つ問おう」

こちらの心境など無視して、話を進める何か。

「お前は今、どうしたいんだ？」

どうしたいか。

そんなもの、決まっている。
生きたい。

「それだけか？」

もう一度問いかけられる。

「お前はただ生きたいだけのか？」

……そうだ。

ただ生きるんじゃない。

自分……の力で、生きたいんだ。

「自分でやる……。その重みを理解しているのか？」

「言われなくても、だ」

だからさ、雷神様よ。

ちよつと力を貸してくれないか？

「その意気や良し」

そう聞こえたが最後、何かが見えた気がした。

「……!?」

助けに来てくれた藍さんも、未だ弾幕を放つルーミアも、驚いていた。

俺はルーミアの弾幕を焼き焦がし、スペルブレイクをしたのだ。

深緑の髪の毛は逆立ち、身体のおちこちがパチパチと言っている。

「……………」

俺は無言で立ち上がり、ルーミアを睨む。
恐怖はもう、無くなっている。

「雷は神々の為せる技」

誰かの声とシンクロするように呟く俺。
言葉を発する度に、力が膨れあがる感覚。

俺の言葉と共に、周囲に雷雲が立ちこめる。

「古より語られる轟音と閃光」

その雷雲から、雷が放たれる。

俺は一枚の白紙のカードを取り出す。

藍さんのケースにあった、予備のスペルカード。

俺はそれを天に掲げ、大声で叫んだ。

「今ここに、かつての雷神の威光を再現する！」

その言葉と共に、スペルカードに雷が落ちる。

その雷はスペルカードに刻印を刻んだ。

「行くぞルーミア！これが俺の本当の弾幕だ！」

たった今作られたスペルカードを宣言する。
これで、決める。

「雷符『天鳴万雷』！」

ルーミアとその周囲に、超特大の雷が何回も落ちた。

そこに美しさは欠片もなく、ただ自然の驚異しか無かった。緑は焼け焦げ、空は暗い色に染まっている。

そして、勝負は終わった。

「これで終わりかよ……もう少し、楽しませろ……よ……」

強気な口調で言った俺は、地面に屈し、意識を手放した。

「どついう事なのだ……」

彼はいきなり雷を呼び出し、即興で作ったスペルをルーミアに当てた。

■は、ルーミアと相打ちまで持ち込んだ。

これが、彼の本当の力？

「あら？ 意外と早かったわね」

突如声が聞こえる。この声は、我が主の物。

「紫様！ これは一体どついう事です！」

先ほどまでの状況が理解出来ない。

一体何故、■はいきなり強くなった？

「私はきっかけを与えただけ。あの電撃は彼の物よ」

「きっかけ……。ルーミアの封印を解いたのは紫様でしたか」

「そうよ」

悪びれずに言う。

よくもまあ人間を強くする為とはいえそんな事をするもんだ。
封印を解いたルーミアは十分な驚異だというのに。

「でもまあ、観察が必要かしら……。戻るわよ、藍」

「え？ それはどういう……」

「橙が待つてるわ。話は後よ」

紫様は■を抱え、スキマに消えていった。

「……………」

やはり、何が起こったのか解らない。

今考えても、仕方がないのかもしれない。

「………… 私も行くか」

私は開けっ放しのスキマに入り、紫様の後を追った。

第四幕：程度の能力（後書き）

ベタベタの伏線を張るしか、出来ませんのお……。

第五幕：君の名前

目が覚めると、一度だけ見た事のある天井だった。

「……どこまでが夢なんだ」

ルーミアと戦って、能力に目覚めたのは……。

「……夢？」

そう言った瞬間、

「■、起きてるか？」

と、どこか懐かしい声が後ろから聞こえた。
俺は後ろを振り向く。

「藍さん」

俺は後ろにいた彼女に、声をかけた。

「その様子じゃ回復したようだな」

俺の顔を見て、藍さんは微笑んだ。

「じゃあ、ちょっとお話聞かせてもらえるかな？」

ただし、背景に般若を抱えながら。

……思い当たる節が一つあるな。
なるほど、全部現実だったか。

「畜生……」

藍さんの拳骨によってたんこぶを十二個くらい作った俺は、橙様に連れられ居間に向かった。
なんでも、紫さんが呼んでるらしい。

「あら、起きたのね」

紫さんは動かしていた鉛筆を止め、こちらに振り向いた。
書いていた紙を見ると、色の名前がずらっと書いてある。
何故か、赤系統と青系統の色の名前が無い。

「……何かご用でしょうか？」

「ちよつとお話がね。」

まあ慌てないでそこに座りなさい。お茶でも飲む？」

お茶と聞いて腹の虫が少し動いたので、俺は頷いた。

「じゃあ藍、持って来て」

「わかりました」

藍さんが立ち上がり、台所へと向かう。

……なんだこのほのぼの家族。
緊張感が抜けるぜ。

「じゃあ、全員揃うまで雑談しましょ？」

「え？ ああ、はい」

微笑む紫さん。

そこに威厳のようなものは感じられない。

俺は思わず頷いた。

なるほど、これが素か。

俺は雑談を始める。内容は、先ほどの戦いの事。

「それにしてもよく頑張ったわね。全力のルーミア相手に引き分けなんて」

「引き分けじゃ意味ないですよ。あの後助けられてなかったら別の妖怪に喰われてたんですから」

「能力に目覚めたじゃない。それで見返りとしては十分よ。

でもまさかあんな苦戦するとはね、予想が少し外れちゃったわ。

ルーミアじゃなくて、チルノとか大妖精を差し向ければ良かったかしら」

「……なに？」

差し向ける？

不穏な台詞に髪の毛が逆立つ。所謂、電撃の準備。
ルーミアを倒したあの電撃。

自然と扱える事に、身体が違和感を感じない。

「あら、知らなかったの？ 全部計算通りよ？」

弾幕ごっこで戦う為にスペルカードを盗む事も。

私の胡散臭さを嫌悪して無理して人里へ向かう事も。
ルーミアと戦えば能力が目覚める事も。

「全ては私の手の上よ」

その発言には、ただただ脱帽するしかなかった。
逆立った髪が収まる。

まあ能力を覚えたし、良しとしよう。

「紫様、お茶菓子を持ってきました」
「ましたー」

丁度いいタイミングで藍さんと橙様がお茶菓子を持って現れる。
さっきの一触即発の状態で来たら、
また藍さんに半殺しにされるところだった。

「丁度いいタイミングね。橙、貴女にも話があるのよ」
「え？ 何ですか？」

面食らった表情で橙様が訪ねる。

「あなたも結構結界の修復が出来るようになってきたわね」
「は、はい」

萎縮しながらも応対する橙様。

「妖力も強くなってきたし、そろそろ八雲の名をあげようかと思う
のだけれど」

「「ほ、本当ですか！！」」

橙と藍さんが身を乗り出す。

八雲って名前に何かあるのか？

「状況がわかってないようね、■」

「ええ、まあ……」

二人がこれほど喜ぶ理由がわからない。

藍さんは油揚げを目の前にした狐みたいだし。

橙はマタタビを目の前にした猫のようだし。

……「八雲の名」というお菓子か？

「あ、その顔変な事考えてるでしょ」

「滅相もない」

危ない危ない。思考が変になってしまった。

それを見破る紫さんも凄いが。

「式にとって主人の名を貰う事は、実力を認められるのと同義なの」

「ははあ」

よくわからん。

「で、話を戻すけど……ちょっと藍聞してるの？」

「えー？ ああはい！」

おい、絶対聞いてないだろ！

そんな眼を輝かせて橙様をナデナデして言っても信憑性に欠けるわ！

「八雲の名をあげてもいいんだけど条件があるの」

「条件？ それは私にですか？ それとも橙にですか？」

真剣な顔で聞く藍さん。

すぐわかりましたとは言わずに条件を聞くあたり、頭がいい人だなと思う。

「橙に」

「……どんな条件です？」

紫さんは少し溜めてこう言った。

「■■■を橙の式神にしなさい」

「「「……………は？」」「」」

紫さん以外の全員が声をそろえた。

「それと、彼に仮の名を。まあこれは考えてあるけどね」

紫さんが何か言ってるが、耳に入ってこない。

入ってきてはいるのだろうけど、入った瞬間に言葉が出て行ってしまふ感じだ。

「わかりました、紫様。八雲の名に恥じぬよう精一杯頑張ります！」

「ちえ、ちええええええん！！」

八雲橙は少し頼もしく思え、その分藍さんが情けなく見えた。

「■■■。いや、緑」

紫さんが——紫様がこちらを向く。
その口から出る言葉は、

「緑^{ろく}、それが今日からのあなたよ」

俺に家に帰ったような安心感をもたらした。

幻想郷の暮らしが始まる。

負の第二幕：観察結果

おや、彼は名前を貰った様だね。

八雲の皆さんに名前で縛られちゃったけど、これで僕の名前を聞く機会は減るかな？

彼が……緑が僕の名前を認識して、僕が表面に出るのは避けたいからね。

それにしても、僕を気絶まで追い込んだあの雷。

今となって思い出せば随分と高い神力を持っていたよ。

まさか無能力の緑を、能力持ちにしてしまうなんて。

いや、貸し与えただけなのかな？

「電気を操る程度の能力」なんて、幻想郷じゃ御法度でしょ。

雷だったら良かったのに、電気じゃねえ。

炎を使う人がいたけど、彼女も能力で炎を扱ってる訳じゃないし、どうにもこの場所には幻想を否定する要素は無いらしいね。

まあそんな事はどうでもいいや。

名前と能力を手に入れた彼なら、これから僕的能力を勝手に使われる事はないだろう。

右腕の治癒に使ったから百歩譲って許すけど、他の事に使ってたら消してた所だよ。

まあ、これで本当に僕は眠れるのかな？

緑ってあまりにも無防備で無気力なんだもの。

僕の身体に傷が付かないか心配だったけど、八雲の皆さんがいるな

ら大丈夫そうだね。

じゃあ緑、彼女達との絆が強まるまで、精々頑張っ
てね。
極力壊し甲斐のある物を作ってくれよ。

じゃあ、お休みなさい。

第六幕：それぞれの常識

俺の朝は、藍様に起こされる事から始まる。

「橙！ 緑！ ご飯だぞ！」

ここは八雲紫様の家、マヨヒガ。

迷い家とも言うが幻想郷ではマヨヒガの愛称が普通だ。

「ファ……ファファ……」

藍様が（橙様の式になったので全員様付け）起こしに来てくれたが、一向に起きようしない俺。

朝はいつも眠い。

好物でも無い限り、俺は起きられないぜ。

「今日のご飯はパンだぞ！」

「っはいしたあー！」

布団を吹き飛ばして覚醒。

久しぶりの洋食だ！

「橙様！ 起きてください！ 今日も素晴らしい朝ですよ！」

「さっきまでファファファ言ってた奴の言う台詞じゃないな」

「それとこれとは話が別次元です！」

だって洋食だぜ！？

どう歪んで見ても和食しか作れなさそうなマヨヒガに洋食だぜ！？

「むにやにや……ふう……」

依然橙様は起きない。

子供らしい愛くるしい寝顔を見せるだけだ。

……隣で藍様が鼻血を我慢してるように見えるのは気のせいだろう。

「今起きてくれたらマタタビを買いに行きましょう」

俺は魔法の言葉を唱える。

「ウニヤ！」

こちらで覚醒。

似たもの師弟である。

あれ？ 俺一応高校生だった気がする……。

「まあ、その……私達実年齢は君より確実に上だし、その……。
大丈夫なんじゃないか？」

藍さんの軽い慰め。

「ならいいか」

そう考えて、俺は同意した。

「いや、そこは同意するなよ……」

「うん……可笑的だと思う」

「え？」

違うの？

俺が一番年下だからOKじゃないの？

「……まあいい。着替え終わったら居間に来てくれ」
「はい」

藍様の言葉に応えて、俺と橙様は着替え始める。

橙様はいつもの中国風の服に。

俺は学生服に。

朝食後、俺は自分の鍛錬をしていた。

今の俺では、八雲家の人々に守られるだけの存在だ。

それは男としてちょっと頼りないと感じたので、修行中だ。
一応能力の暴走の可能性もあるので、橙様が監視している。

「電気を使えるなら、応用が広いからな！」

近くの木々に片っ端から放電を放つ。

瞬間、目を閉じてしまう程の閃光が俺を襲う。

目が見えるようになって真っ先に見たのは、焼き焦げた木と、無傷の木。

「くそっ……全然力が制御出来ない……！」

そのばらつきは、俺を不快にさせた。

その様子を一部始終見ていた橙様は

「緑、ちょっと付き合いなさい」

と言った。

「付き合うつて……修行ですか？」

「そうよ。簡単な弾幕ごっこをしてほしいの」

真剣な目でこちらを見る橙様。

橙様の意図は読めないが、その迫力に圧されて俺は頷いた。

「では行きますよ、橙様」

「かかってきなさい、緑」

両者構えの体勢。

「凶兆の黒猫、八雲橙」

橙様の宣言。

「狐と猫と隙間の式、緑」

俺の宣言。

今まさに戦いの火ぶたが切り落とされようとしている。

「いざ参るッー」「」

弾幕ごっこが始まった。

ここでひとつ、俺の能力を説明しよう。

『電気を操る程度の能力』

これは紫様や藍様によると、結構応用が利くらしい。

「だからって戦闘中にそんな応用なんて出来ないよな……！」
「余所見しない！」

橙様の声。

お互いの弾が当たり、弾け、砕け散る。

近くからじゃわからないけど、遠くから見ればさぞかし綺麗な光景だろう。

お互いがある程度力を使ったところで橙様が距離を取り、ひときわ強い弾幕を放つ。

「仙符『屍解永遠』」

一瞬見蕩れてしまうような弾幕に、思考が奪われる。

「……ってうおお！ 危なっ！」

反射的に電撃を放って弾幕の一部を相殺する。

その際の爆風を利用して、俺は一気に距離を引き離す。

「なかなかやるじゃない！」
「そいつはどうも……っ！」

畜生、スペルカードを宣言されたら勝てないな。

俺のスペルカードは……駄目だ、あれを使うのはちょっと怖い。

……そうだ、宣言させなければいいんだ。

俺はそう思いながら、弾幕を避けきる。

橙様は続けざまに、スペルカードを宣言しようとした。

「させるか！」

が、俺は電撃を橙様の手に発射する事によって、スペルカード宣言を阻止した。

その雷は橙様の手のスペルカードを焼き焦がす。

『悪い目は早く詰む』

それが、今俺に出来る最大の戦略。

「弾幕はスピードだあ！」

俺は更に、電撃による追い撃ちをする。

「ちょ……！ スペルカードを狙うのは反則だって！」

「真剣勝負にそんな事関係あるかあ！」

俺はそう叫び、弾幕の濃さを強くする。

「方符『奇門遁甲』！」

橙様がまたスペルカードを宣言する。

しかし、弾幕が発射されるまで若干のタイムラグが発生する。

「！」

そこを俺は、見逃さない。

密度の濃い弾幕を放ち、橙様が吹き飛ぶ。

「はあ、終わったか……」

力を抜く。

あ、吹き飛んでいった橙様を助けられないとな……。空に向けて飛ばしたから、途中空を飛んで復帰するかもしれないが

「油断するんじゃないわよ」

万が一橙様が気絶していたら藍様に……

「へ？」

馬鹿な。

確かに弾は当たった、手応えがあつたんだ。なのに何故、橙様は俺の真後ろにいる？

「身代わりの術を使わせるほど強くなったのは嬉しいけど」

疑問を解決させる台詞。

同時に、俺の背中に悪寒が走った。橙様は手を掲げる。

「敵の撃墜を確認しないうちに気を抜くなんて、まだまだよ」

俺の心臓に向けて橙様が妖力の弾を放つ。

たった一発だが、勝負を終わらせるには十分過ぎる威力だった。

「ま、負けたあ……」

服を泥だらけにしてしまった……。

そろそろ新しい服を買わなければ……。

「怪我は少ないね。まあ合格点かな？」

橙様の言うとおり、体に傷が少ないのがせめてもの救いだ。
これ以上汚したら全裸生活だった。

「いや、その発想は可笑しいでしょ……それにね、緑？」

橙様がキツとこちらを睨み、

「さっき貴方が行ったスペル宣言の阻止、あれ、反則だから」

そう言った。

「いや、真剣勝負だったから……」

「弾幕ごっこは遊びよ」

反論しようにも、橙様がそれを遮る。

「真剣に遊べって言葉もあるけど、それでも遊びなの。命の削り合
いじゃないの」

「……………」

知っている。

紫様から聞かされている。

だのに、俺の何処かで『生きる為に手段は選ぶな』という声が聞こ
えてくるような気がするんだ。

本能に刻まれ、それを何度も心に言い聞かせてきたような。
そんな感覚が、遊^{戦ってる}んでる最中ずつと有った。

「今の内にその認識、緑の持つてる常識を幻想郷に合わせて。じゃ
ないと、紫様に消されちゃう」

橙様は、どこか懇願するような雰囲気を書き加えてそう言った。

第七幕：表と裏

「緑、橙、ちよつと来て」

昼頃、紫様が俺達を呼んだ。

先ほど橙様と行った弾幕ごつこのおかげで体の節々が痛いのを堪え、声の聞こえた玄関の方まで行く。

「なんでしょう?」

見れば、藍様と何処かへ行く最中のようなだった。
何か忘れ物だろうか。

「はいこれ」

紫様が二枚のスペルカードを俺達に差し出す。
見れば、同じ絵柄が描いてある。

「……なんすか、これ?」

当然、疑問に思うので聞いてみる。

「プレゼントよ。それには私の能力を術式で再現してるから、一回につき一つだけスキマを開けるわ」

「っ!? マジで!?!」

「いいんですか!?!」

俺はあまりの喜びで敬語じゃなくなってしまった。
失礼とは解っているが、俺にとってはそれほどの代物なんだ。

「大マジよ。何回でも使えるから気兼ねなく使ってね」

扇子で顔を隠す紫様。

いい事してるのに、恥ずかしがってるのだろう。
ちよつと可愛いです。

「あ、連絡にも使うから無くさないでちょうだい」
「わかりました。ありがとうございます」

俺はお礼を言つて、笑顔を作った。

紫様はそんな俺の顔を見て、一瞬だけ目を細めた。

「じゃあ、行ってくるから。お留守番よろしく」

「はい」

「……ここでいいかしらね」

「紫様、話つて何でしょうか？」

そこはスキマの中。

八雲紫は、スキマ越しに新しい式を見ていた。

「緑……いえ、むどうみなと夢道湊についてよ」
「!?」

紫は彼の危険性を知っている。だから、藍に彼を保護させた。

「吹き飛ばされた腕を一瞬で治し、博麗大結界を通り抜けられ、人

格を創造する……。

これが一人の人間の能力かしら？」

「……………」

どんな能力かは湊本人しか知らない。

でも、その力が及ばず影響は理解出来る。

少なくとも、ここを守る立場である紫には。

「だから、橙に伝えて。緑に何か異変があったら迷わず……殺しなさい」

「これ宣言の必要があるけど、スペルカードなんですか？」

「いや、ただの通信用御札だと思うよ？」

紫様と藍様が何処かへ行った直後、俺と橙様は貰ったスペルカードについて調べていた。

ある程度解析が終わったので、試しに使う事にする。

「「借物『隙間の恩恵』」」

二人で揃えて宣言すると、目の前に二つのスキマが開かれた。

「あれ？」

ただし、俺の目の前に開かれたスキマは何故か歪な形をしており、例えるなら割れた窓ガラスだった。

「あ、これ妖力用じゃん」

「え？　じゃあ俺使えないの？」

折角のプレゼントが……。

紫様ちゃんと調整してよ……。

「うーん、移動や通信に支障は無さそうだけど、出入りが辛いかな……」

「と言うと？」

「多分、スキマが刺さる」

「……どういう事ですか？」

「境界線が色濃く歪に顕現してるからちよつとした刃物の様になつて……。

まあ、入れば解ると思うよ？」

入れば解る、か。

説明聞いても全く理解出来なかったから、それはありがたい。

「あ、そうだ。ついでに買い物に行きたいんですが……」

「いいよ。何処？」

「学ランがそろそろ破けそうだから、服が欲しいんですよ」

「ああー、なるほど」

正直弾幕ごつこの為に着る物じゃないと思う。

いや、そもそも運動系全般に適していない。

「じゃあ行こうか。えつとお金は……ん？」

橙様が家の財布を確認しようとしたところで、いきなり橙様の動きが止まった。

「あ、紫様から通信だ」

あ、早速通信が来たのか。

俺の所に来なかったのは……やっぱり霊力と妖力の違いかな？

「はい、わかりました……緑、先に行つてて」

「え？」

「これがお金ね。移動場所は魔法の森の入り口に座標を指定してね」
「え、ちょ、橙様？」

何？ 何があつたの？

気になってソワソワする俺を見て、

「……ごめん」

橙様は俺をスキマに突き飛ばした。

スキマに触った箇所が、切り刻まれる。

「痛つてえ！ なんだこのスキマ!？」

「後で行くからー!」

「アッー!」

変な断末魔を叫びながら、俺の身体は完全にスキマに入った。
スキマの中は不気味な浮遊感が有った。

「くっ……かはっ……!」

投げ捨てられたように地面に着地する。

スキマから出る際、また身体に切り傷を負ってしまった。

「痛過ぎだろ……」

起き上がり、痛む箇所を見る。

左足は泥と血だらけ、両肩も赤く染まっていた。

「畜生、今度から自力で調整するか……」

折角新しく服を買っても、これではすぐに傷が付いてしまうだろう。

「さて、ここは……」

見たところ、薄暗い森の入り口の様だった。
入り口には、こじやれた店が一軒ある。

「ここかな？」

ゆっくりと近付き、中の様子を見る。

外から見た店の中には、食品の他に日本刀、自転車、た。こつち、
i P。d、ガ。プラ、ダイヤモンド、
洋服、DVD、野球ボール、広。苑、抱き枕、グランドピアノ、シ
ヤーペンシル、何かのリモコン、
ハエトリソウ、可愛いフィギュア、鉄パイプ、。S3のコント
ローラー、e t c、e t c……。

一言で言うと、節操がない。

「この店はなんだ、ガラクタ置き場か」

失礼な事を思いながらも店の中に入る。

「すみませーん、誰かいますかー？」

三秒間待つ。

特に返事は無い。

「誰もいないのか？」

「残念だったね、一人いるよ」

不意に、入り口の方から気配が感じられる。

振り向けば、白髪的眼鏡をかけた男性がそこにいた。

「昨日は咲夜で今日は見知らぬ男性か……」。

営業時間……それ以前に定休日を知らないのかい？」

「それはすいません……ところで定休日はいつですか？」

「僕の気まぐれで決まる」

わかるわけないだろ。

「趣味と実益ってやつさ。この店は僕の趣味でやっている」

噛み合ってるようで噛み合わない会話。

その中で掴んだ彼の個性。

この人は……変人だ。

「おっと、自己紹介が遅れたね。僕の名前は森近霖之助、この香霖堂の店主さ」

彼????霖之助さんはそう名乗った。

「それで、君の用事は何なのかな？　冷やかしなら帰ってもらうよ」

そう言いながら彼は店の奥にある机に座り、こちらを見た。

俺は用件を言う。

「……服を買いに来たんだ」

「へえ、いいタイミングだね。丁度昨日新しく拾ってきたばっかなんだ」

霖之助さんは立ち上がり、近くにあった洋筆笥の引き出しを開ける。

「こんなのはどうだい？」

彼が取り出したのは、紺のジーパン柄、緑のチェック柄のＴシャツにオレンジのパーカーだった。

うん、良いんじゃないか？

「試着は可能ですか？」

「勿論だよ。ここで着替えて構わないさ」

それを聞いて、俺は学ランを脱ぐ。

あ、そういえば大怪我して出血中だったな。

「すみません、この服預かって貰えます？」

「……いや、まず怪我の治療を頼むんじゃないかな？」

あれ？

霖之助さんは本来なら商品であつたはずの救急箱を使用して、俺の傷を塞いでくれた。

応急処置だが、血が漏れなくなったのはありがたい。

「本当なら店には行つて真つ先に治療を進めるべきだつたんだけど、君があまりにも平気そうな顔してるから忘れちゃったよ」

「そ、そうですね……」

自覚無いな。

「まあ、これで試着が出来るね」

「そうですね、では」

俺は緑の服に袖を通す。

「似合いますかね？」

「いいんじゃないかな？」

次は紺のズボンを履く。

「ところで今の考えでは、その服は買う事になつてゐるのかな？」

「半々ですかね、姿見を見て決めますよ」

最後に俺は、オレンジのパーカーを羽織った。

「……意外と動きやすいな」

軽く腕を振ってみる。

抵抗は少ない。

「はい、姿見」

霖之助さんがわざわざ姿見を持ってきてくれた。
俺は自分の姿を凝視する。

「買った」

「毎度ありがとうございます」

眈々とした買い物が終わり、現在俺は店の中を見て回っていた。

「しかし、本当にいろいろあるな」

改めて見回すと、何でも屋の名に恥じない量の品物がある。

「あ？　なんだあれ？」

ふと霖之助さんの座ってる場所の奥を見ると、ひときわ異彩を放つ物があった。

「霖之助さん、何で店の奥に鉄パイプ？」

「ん？　ああ、あれは魔法具、マジックアイテムだよ」
「マジックアイテム？」

妙にそそられるネーミングじゃないか。

「マジックアイテムって何なんだ？」

「普通の道具ではなし得ない事が出来る道具……僕らの言う能力の道具版さ」

能力の道具版、か。

「なるほどねえ……じゃあ、その鉄パイプはどんな特殊効果があるんだ？」

「これかい？」

霖之助さんはそれを取り出し、中心を持つ。

「これは通常時は特にたいした特徴もない、ただの鉄パイプだよ。でもね？ よっと」

突然鉄パイプの端を持ち、大きく振るう霖之助さん。すると、何処からか半透明な刃が現れた。

無機質な鉄パイプは、存在感を大きく示す大剣となったのだ。

「こんな風に靈力によって構成された刃が発生する。

発生の方は人それぞれで、剣にも槍にもなってしまう。

僕はこれを、『無角棒^{むかくぼう}』と呼称してるんだ」

霖之助さんはその無角棒を仕舞い、椅子に座り直す。

「……その武器、いくらで買えますか？」

「無料でいいよ。これ、失敗作だし」

その言葉を聞き、すかさず八角棒を手にする。

「少しは遠慮してくれてもいいんじゃないかな？」

「……何が？」

「……いや、もういいよ」

霖之助さんは何が言いたいんだろう……。

まあ、考えても無駄かな？

その後俺は、店を出てマヨヒガに帰った。

橙様が迎えてくれたが、笑顔がぎこちなく感じた。

第八幕：スペルカード

見渡す限り真っ白で、
上も下も右も左も前も後ろもわからない場所。

——ここは精神世界。

己に疑問を持つ者の訪れる場所。

「なあ、雷神様よ」

「なんだ」

緑は、そこで己の能力に問いかける。

「『電気を操る能力』……これは俺の力なのか？」

「そうだ」

雷電の化身、雷神様に。

「本当にあんたの力じゃ無いのか？」

「……何が言いたい」

「俺は自分の力で生きようと願ったんだ。雷神様の力を借りてちや意味がないだろ」

「なんだ、そんなことか」

雷神様は嘲笑する。

「これは確かに俺の能力だ。しかし、使役するのは貴様自身だ」

「……何が目的だ？」

緑は恩人に対して、怪訝そうな顔をする。

「今はまだ知らなくていいだろう。その力、まだまだ強くなる」

雷神様は、緑に対してこう言った。

「貴様は何も考えるな、ただ強くなれ」

雷神様はそう言って、白い空間に溶けていった。

「まったく、なんだっての……」

日も上がってない時刻、俺は目が覚めてしまった。
目覚めは、前の時のように最悪だ。

「ただ強くなれって言われてもな……」

目的も無しに、強くなれる訳がない。
八雲家の皆の力を借りずとも、今の俺なら自力で生きられる状況である。

既に目的は、達している。

「……自主修行するか」

それでも、腕を上げておくにこした事はないだろう。
単に言いなりになるのが嫌なだけで、修行が嫌いな訳じゃない。

「……俺は誰に言い訳してるんだろうな」

自分でわかっているのに、あえて自分に聞いてみた。

「……ははっ、答えなんて返ってこないよな」

布団を畳んで、香霖堂で買った私服に着替えた。

紫様は、まだ帰ってきてない。

「……よし、出来た」

結論だけ述べると、今日の修行で自分で紙に書いた術式が発動するようになった。

つまり、作りかけだったスペルカードを完成させたのだ。

ここで補足しておく、本来ならスペルカードはこういう物ではない。

宣言用に適当な紙があればそれで事足りる。

だが、俺は記憶力と集中力が高い方ではないので同じ技を使う事が非常に難しい。

そこで簡単なパターンを術式として描き、何度でも同じ技を使う事が出来るようにしたのだ。

それでも多少集中力はあるが、威力と密度くらいしか影響しないだろう。

「橙様に試してもらおうかなあ」

不意に時計を見る。

「……まだ時間も早いし、自分で試すか」

不備があつたら橙様に迷惑をかけるしな。
俺は立ち上がり、外に出る。

「お、妖精がいるな」

結構力の強そうな妖怪が三匹いた。
見れば、悪戯の準備をしているようだった。

「……警告する。この場で悪戯をするのならば、容赦なく貴様等に
弾幕を浴びせる」
「「「!?」」」

三匹の妖精は、驚いたようにこちらを見る。

「ちょっと！ こんな時間に人がいるなんて聞いてないよ！」

「どうする？ 退却する？」

「そんな訳無いでしょ！ こうなればあの弱そうな奴をボコボコに
して続行するわよ！」

妖精達の会話が聞こえてくる。

どうやら、悪戯を止める気はさらさら無いらしい。

……うん、悪い目は早く摘もつか。

「電符『ライティングブレス』」

スペルカードを宣言する。

「え、ちょ！」

すると、俺の前方に向けて大弾がランダムに発射される。前面に対処するような弾幕だ。

「こっちはまだ準備もしてないよ!？」

いきなりの弾幕で、三匹の妖精は戸惑っている。

「……初めてにしては良好だな」

その大玉はある程度進むと急に止まった。弾に囲まれる体勢になった妖精達。

「……流れるっ！」

俺のかけ声を合図に、弾と弾の間に電流が一瞬で走る。

「キャアアア！」

「サ、サニー!？」

その電流は、サニーと呼ばれた妖精を丸焦げにした。

「……威力調整に失敗したかな？」

自身のスペルカードを手に、術式を書き換える俺。

「お、覚えてなさい！」

「飯は必ず返したりするんだから！」

残りの妖精が、丸焦げの妖精を担いで逃げ出した。

「……………」

俺はその様子を、術式を書き換えながら眺めていた。

「緑、買い物行ってきた」

あれから数時間、橙様にご飯を作りながら俺を呼んだ。
太陽は既に西に傾いている。

「わかった。何を買えば」

「はにゃ！」

俺が台所に入ると、橙様は吹きこぼれた鍋の対処に慌てていた。

「……………」

最近、藍様が鼻血の弾幕を出す理由がわかってきた気がする。

「……………何買えばいいんです？」

橙様はお鍋を抑えながら言う。

「お醤油とみりん、お魚を適当に四匹！」

「はい」

気の抜けた返事をし、

紫様からのプレゼントを取り出す。

「借物『隙間の恩恵』」

そしてそのまま、人里へ向かった。

「よいしょ……いててて」

スキマを抜けて人里の手前に降りる。
それにしても、いつ使っても出入りが痛いなあ……。

「クッションでも持ち歩こうかなあ」

なんて間抜けな事を考えていると、

「キャアアアア！」

女性の悲鳴が聞こえた様な気がした。

「……気のせいかな？」

「誰か、誰か助けて！」

……気のせいじゃないな。

俺は悲鳴の聞こえた方に向けて走りだした。

悲鳴があつた場所は、人里に近いとも遠いとも言えない草原地帯。

駆けつければ、妖怪が可愛らしい女の子を襲っていた。

他にも、防具を着た大人の死体がごろごろ転がっているのが見えた。

少女と妖怪の距離、約30センチ。

「おりゃ」

走りじゃ間に合わないと悟り、すぐさま電撃を放つ。

それは見事に、妖怪の顔に命中した。

相手が怯んでる隙に、妖怪と少女の間に入る。

「間に合ったな、お嬢さん。早く俺の後ろに」

「え……？ あなたは？」

「緑。ただの非凡な式神さ」

適当に対応しながら、妖怪の方を向く。

「ぐおおおおお！」

視界が急に暗くなる。

とっさに少女を抱えて跳ぶと、元いた場所にクレーターが出来た。
俺は妖怪に話しかける。

「まったく……人里付近での捕食行為は禁止って知らないのか？」

妖怪は顔をしかめたまま俺の問いに答える。

「知った事か。この牛鬼が海を捨ててまで来ているのだ。
邪魔立てするなら、貴様も食らう！」

そんな台詞を言い放ち、妖怪牛鬼が真っ直ぐ俺を襲いに來た。

「お前の事情なんてどうでもいいよ。とりあえず消えろ」

俺はスペルカードを構える。

折角の機会だから活用しないとね。

「電符『ライティングブレス』」

動きを制限するような弾幕から、致死量を遙かに超える電流が流れた。

「ただいまあ」

「お帰りなさい」

時刻は六時。

割と早く帰ってこれたな。

「よいしょ……いててて」

俺は痛みを堪えて居間に降り立つ。

蛇足だが、靴は脱いでおいてある。

ついさっき玄関に投げ捨てておいた。

「はい、醤油にみりん。魚は全部切り身だから」

「……丸々一匹がよかったな」

「売ってなかったよ、そんな大きいの」

嘘だ。

本当は高すぎて買えなかったただけだ。
ていうかこっちの方が調理は楽だ。

「仕方ないなあ、ご飯にしよう?」

「うん」

俺は二人分のご飯を茶碗に盛る。

「そっいえば橙様」

俺は今日助けた女の子について話す事にした。
橙様の手には、味噌汁が掴まれている。

「なに?」

橙様なら知ってるかと思い、俺は少女の名前を問う。

「稗田阿求って知ってる?」

第九幕：人里の相談所

「稗田阿求……なんで緑が知ってるの？」

橙様が味噌汁をちゃぶ台に置きながら喋る。

「え？ 何？ そんなに有名？」

「有名過ぎる有名人。お金持ちで歴史の本書いて転生者」
「なんだその属性過多」

お金持ちは護衛がいたから納得。

歴史の本つてのは……賢そうだから無くはないな。
でも、転生者？

「転生つて……閻魔様に媚び売る感じ？」

あんな可愛い顔して結構狡猾なんだな」

「いや、だいたい違うから」

「？」

……違うの？

「だからその思考回路を直して……ああもういいや。
で、その阿求さんがどうしたの？」

「今日人里まで行ったら、その人が襲われてたんですよ。」

それで明日、お礼を貰いに人里に行くんですけど……駄目ですか？」

俺は橙様の顔を見る。

「……いいよ」

橙様は、快く了承してくれた。

そして現在。

「ここが稗田さんのお宅か」

目の前には、日本風のお屋敷がある。

ここが稗田さんのお宅だ。

囲いを見る限り、かなりの大豪邸だというのがわかる。

「すいませーん」

玄関をノックしてみる。

しかし、返事はない。

「こう言うところは不便だよな……」

インターホンのありがたさを身に染みて実感した。

しばらくすると、声が聞こえた。

「誰だ、玄関で謝ってるのは」
「違う」

あ、でも幻想郷じゃすいませんとは言わないのかな？
改めて玄関をノックする。

「ごめんください」

「それなら家を出て右の所に売ってるよ」

「……おめんください？」

「……………」

いつの時代のギャグだよ。

「で、何のご用でしょうか？」

用件を言う俺。

「稗田阿求さんいますか？」

「あ、阿求様のお客様でしたか。どうぞこちらへ」

俺はその人に連れられ、屋敷の中へと入っていった。

応接間で待つ事十数分。

綺麗な着物を着た少女が訪れた。

「先日はお助けいただきありがとうございます。」

私は稗田阿求と申します」

清楚な印象が強い稗田家の当主。

少し、顔色が悪い気がするのには気のせいだろうか？

「先日は有り難う御座いました」

「いえ、私はたいした事などしてませんし……」

慌てて首を横に振る俺。

口や動作では否定しているが、内心とても嬉しい。

「それで、お礼と言うのは……」

「あ、はい。何でも言うてください。可能な限りお答えします」

「は、はあ……」

何も要らない……は無しだな。

拒否したとしても、向こうの気持ちを無下にする事になる。
だったら最初から望みを考えていた方がいいだろう。

それにしても、望みか……。

俺が欲しいのは力とか知識だからなあ……。

稗田さんがどうこう出来る問題じゃないからな……。

ん？ 知識？

そういえば橙様が彼女は歴史の本を書いているって言ってたな。

「……稗田さんは歴史書を書いているそうですね」

「あ、はい。幻想郷縁起と言うものを書いています」

よし、決めた。

「それを見せてください」

「なるほど……紅魔異変ね」

助けたお礼として俺が望んだのは、
幻想郷の歴史書、『幻想郷縁起』を全部読ませてもらうことだ。

俺はここに来たばかりで全くもって幻想郷について知識がない。

紫様の式の式の式だと言うのに、そのくらい覚えておかないと彼女
達が笑われてしまうかもしれない。

それに、この本は歴史書だけでなく人妖についても書かれているの
で、

これからの行動においてトラブルを起こさない様に出来るであろう。

なるほど、俺がくる前に異変が5回もあったのか。

一度異変を生で見てみたいなあ。

「まあ、そんなこと望んだら怒られるな」

幻想郷縁起をめくる音が部屋に響く。

ふーん、月が欠けた永夜異変なんてのもあるのか。

なになに……首謀者は八意永琳。

現在は迷いの竹林にて薬屋を営業か……。

今度行ってみるかな。

「ん？ 人間も書いてあるのか」

人名と容姿の写真、能力から所在地まで事細かに書いてある。

「たまに人外な能力を持った人がいますから、書いておく必要があ
るんです」

「へえー、便利だなこの本」

歴史書っていうより、ガイドブックな気もしなくもない。

「蓬莱人、藤原妹紅……蓬莱人ってなんだ？」

「簡単に説明しますと、不老不死の元人間です」

稗田さんのありがたいタイミングでの解説。

「不老不死って……そんなのになれるんですか？」

不老不死なんてもの、人類の永遠の夢だろうに。
いや、幻想郷だからあり……なのか？

「材料さえ用意すれば、八意さんが作ってくださいますよ？」

「果たして用意すべき材料を知っている人が人里に何人いるのだから」

誰も頼めないんじゃないか？

それにつけても八意さんすげえな。

ますます会いたくなってきたぜ。

「それにしても女性しかいないな。もっと男性で強い奴がいても……
…お？」

幻想郷の人物紹介欄に、男性が三人書かれていた。

よかった。男尊女卑ならぬ女尊男卑な社会なのかと錯覚するところ
だった。

ページをめくる。

「なんだ、霖之助さんじゃないか」

ふんどしで仁王立ちした写真だ。
……何があった。

更にページをめくる。

「魂魄妖忌、現在行方不明……なんだ会えないのか」

腰に刀を二本差したロマンスグレーなお爺ちゃんの写真だ。
半人半霊らしい。

「この方のお孫さんが探すのに手伝ってくれと言われたので、こっ
して載せてるんです」

「へえ、そうなんですか、見つかるといいですね」

俺は解説を聞き流し、更にページをめくった。

「こいつで最後か……名前は南昌なんしやうあん暗吾か」

首から上が毛玉を被ったような人間の写真が描かれている。

「持ち前の能力を生かし、相談所を営業？」

「彼、見た目の割に頼りになるって評判なんですよ？」

「ふーん、帰りに会ってみるか」

そう言いながら、俺は見落としたページがないか確認して稗田さん
に幻想郷縁起を渡した。

「ありがとうございます」

「いえ、どういたしまして。あ、昼ご飯食べていきますか？」

「大丈夫です、それでは」

俺は稗田さんに挨拶をして、例の相談所に向かう準備をする。
去り際に、橙様が八雲姓を貰った事も伝えておいた。

賑やかな商店街。

人妖入り交じっても、ここは平和だ。

「ここか……」

とある店の看板を見る。

「学校の近くにカウンセラーか、考えてるな」

寺子屋の向かい、南昌相談所はそこにあった。
スクールカウンセラーも兼ねているのだろうか。
相談所のドアを開ける。

「おや、いらつ、しゃい」

部屋の中は全体的に薄暗く、椅子と机と
一心不乱にルービックキューブを弄る毛玉しかなかった。

「何の、用、か、な、？」

その毛玉——南昌暗吾は問いかける。

毛玉と思われたものは髪の毛で、口元しか見えない程に放置された
ボサボサの髪だった。

そして白黒の縞々という、不気味な髪の色。

服装は所々継ぎ接ぎがされている袴。

赤や青など派手な色から、灰色や茶色といった落ち着いた色の布で縫われている。

「ちょっと人生相談を」

俺は嫌悪感を隠しながら、来客用の椅子に座る。

「君……いや、なんでも、ない、よ」

暗吾さんは一瞬動揺したような口調になったが、すぐに落ち着いた口調に戻る。

俺は口を開き、暗吾さんに相談をした。

「強くなりたいんです」

「何、故？」

「紫様や藍様……自分の主を守りたいからです」

「うん、知って、る」

暗吾さんは、俺の顔を見ながらそう呟いた。

「知ってる？」

「そう、知って、る」

言葉の意味を反芻するように喋る暗吾さん。

「……一体何なんだ、お前は」

「南昌、暗吾。相談、所、を、営んで、る、ただ、の、外来、人、

さ」

暗吾さんは見据える様な視線を向けて言う。
その眼は、こちらからは見えない。

「君、は、確か、に、強く、なり、たい、と、望んで、い、る。
それ、も、自分、の、主、に、極力、迷惑、を、かけ、ない、よ
う、に」

的確に俺の考えを言い当てる暗吾さん。

「雷神、様、の、意図、が、読め、ない、から、
恩人、の、力を、借り、る、の、が、怖い、と、思っ、て、い、る、
ん、だ、君、は」

暗吾さんは更に、雷神様の事についても言い当てる。

「幻想郷、縁起、を、見て、ここ、に、来た、よう、だけ、ど……
なる、ほど、ね。

見ず、知ら、ず、の、他人、に、は、迷惑、を、かけて、いい、
と、思っ、て、る、ん、だ。

いや、はや、見た目、だけ、じゃ、なく、中身、も、そっくり、
か」

終いには、俺が知らない事についても言い当てた。

「……それがあんたの『人を知る程度の能力』か」
「正解。よく、出来、ました」

ルービックキューブを動かしながら、呟くように言う暗吾さん。

「私の、能力、は、人、を、知る、程度、の、能力。
君、の、過去、や、思考、性格、更に、表面、心理、や、深層、
心理、本来の、性格、も、全部、理解、出来、る」

暗吾さんはゆつくりと諭すように話す。
その口調が、俺を大きく苛つかせる。

「強く、なり、たい、なら、私、じゃ、ない、別、の、赤、の、他
人、を、紹介、しよ、う。
で、も、君、に、は、八雲、橙、と、いう、師匠、が、いる、ん、
だろ、う？」

「……橙様には迷惑をかけたくない」
「だよ、ね、知って、る」

暗吾氏は一面も揃わないルービックキューブを投げ捨て、こう答えた。

「結論、か、ら、言う、と、君、は、永遠、亭、の、薬、師、を、師
匠、に、する、と、良い。」

彼女、は、頭、が、良い、し、人も、出来、て、いる。
電氣、を、扱う、君、が、力、を、つける、に、は、もって、こ
い、さ。

どう、せ、挨拶、に、行く、うと、して、るん、だ、ろ、う？」

どうにも、俺の行動は見透かされやすいようだ。
いや、これはただ単に暗吾氏が俺を知っているだけなのだろう。

相談を受け終えた時には、もう日が暮れていた。
橙様が心配してると思い、俺は素早くマヨヒガに帰る。

「お風呂沸いてるから入ってもいいよ」

橙様は特に気にした様子でもなく、俺に風呂へ入るよう促した。

「わかりました」

俺はすぐに風呂に向かい、疲れを取る事にした。

「修行か……」

マヨヒガで俺しか使わない風呂場。
水音が、虚しく響く。

今日は、いろいろとあった。
八雲の式として、こんな俺では彼女たちの恥だ。

「南昌、暗吾か……」

不意にあの変人の事を思い出す。

……不思議だ。

どうしようもないくらい不気味で、不快感を加速させる喋り方だといつのに。

「南昌暗吾……何処かで会ったっけ？」

どうにも嫌いにはなれないのだ。
まるで、夢の中で会ったかの様な。

「……それはないな」

夢でも精神世界でも、彼に会った事は一度もない。
彼みたいな髪の色なら、絶対に気付く。

「……気のせいだな」

俺はそう結論付けて、風呂から出る。
目の前は湯気のせいではやけていた。

第十幕：身勝手な行動（前書き）

今回はオリジナル展開有ります

第十幕：身勝手な行動

夢を見た。

それはとても単純な内容で、最低な内容だった。

夕日が差し込む教室の中、男が女の顔を殴り続ける夢。

何度も何度も、相手の顔面が痣だらけになろうと血まみれになろうと。

憎しみと快感をぶつけ続ける一人の外道の夢。

それを俺は何度も何度も見せられた。

どうして俺がそんな夢を見るのかは解らない。
理解出来ないし、したくもない。

ただ一つ言える事。

その女性を殴り続ける外道は、俺に似ているという事だけだった。

俺が幻想郷に来てから二ヶ月が過ぎようとしていた。

外には雪が降り、夜空に浮かぶ月は綺麗な丸を写している。

「……また、あの夢か」

そんな中、俺は眠りから目覚める。

「……何時まで寝ていたんだ？」

重いまぶたを開けて時計を見ると、針は十時を指していた。

未だ微妙に覚醒していない頭を揺さぶり、身体を起こす。
ふらつきが収まったところで、俺は布団を畳み始めた。

「ん？」

敷き布団に手をかけると、一枚の紙が存在しているのに気付いた。

「……橙様？」

どうやら、俺に対しての置き手紙らしい。

緑へ

藍様と一緒に宴会へ行ってきます。
お留守番お願いね。

八雲橙より

P S ついでに紫様と藍様と一緒に月に行きます。

「どう考えても追伸の方が重要だろ！？」

眠気が一気に吹き飛びました。
ていうかしつかりと八雲姓強調してるなあ……。

「……待てよ？ 今なら永遠亭に行っても大丈夫じゃないか？」

手を顎に当てて思案する。

大丈夫……かな？

「借物『隙間の恩恵』」

ここにいっても自主修行しかする事がないので、師に頼る事にした。
この好意が怒られるとしたら、その時はその時だ。

「今考えたって、無駄だしな」

俺はスキマの中に入っていった。

「紫様、緑が人里の相談所に向かいました」

「そう、わかったわ……」

紫のスキマの中、彼女たちは緑の監視をしていた。

「このままでは奴の復活も早まりますかね……」。

人の中身が無尽蔵に見通す読心能力、南昌とかいう人間も余計な事を……」

藍はスキマ越しに緑を睨み、会ってもいない暗吾に対して悪態をついた。

「……知っててやってるのかも」

突然、ポツリと橙が呟く。

「え？ どういう事だ橙？」

「……いえ、何でもないです」

しかしその発言は、本人によって打ち消される。
紫だけが、橙の真意を読み取っていた。

スキマを抜けた先は、相談所の入り口前だった。

「あれ？ おつかしいなあ……」

中に入るつもりでスキマを開いたんだけどな……。
まだ上手く扱い切れてないのか？

まあいいや。中に入ろう。

「おい、暗吾さん！ お客様ですよー！」

ドアをノックしながら叫ぶ。
すると中から、毛玉が現れた。

「……君、は、営業、時間、を、知らない、のか、い？
それ、より、も、大声、で、叫ば、ない。近所、迷、惑、だ、ろ
う？」

暗吾さんはそう言いながらも中へ入れてくれた。

「気まぐれに定休日を変える人を知ってるんでね。生憎参考にしてないんだよ」

俺はそれに対して皮肉で返す。

ただし、皮肉相手は暗吾さんじゃない。

「だから、それ、より、も、大声、で、叫んだ、事、に、対し、て、謝罪、を、しろ、と、言っ、て、るん、だ、が？」

「近所の人にだろ？ ここにいない相手にどう謝れと？」

「……謝る、意志、は、ある、ん、だ。意外、だ、よ」

なんだその台詞。

まるで俺が全く人に謝らない性格みたいじゃないか。
どんなDQNだ。

「……スペル、カード、ルール、に、違反、し、て、反論、し、た、奴、の、台詞、じゃ、ない、ね。」

相、も、変わらず、不安定、な、思念、だ、よ、君は」

俺に悪態をつきながら、暗吾さんは知恵の輪を弄り始める。

……そこまで言われると

「返す、言葉、も、無、い？」

暗吾さんは俺の思考に合わせるように喋った。

ああ、やっぱり常に読まれてるのか。

「私、は、ね、『読まれる』って、表現、が、好き、じゃ、無い、んだ。」

表現、する、なら、『知ってるだけ』だ、と、言っ、て、ほし、い、ね」

「同じだそんな物」

「っかどうでもいい。心底どうでもいい。」

「君、も、そう、言っ、の、か……変、な、ところ、で、同じ、なん、だ、か、ら、なあ……。」

……おや、永遠、亭、に、行く、つもり、なん、だ。今、更、決、め、る、と、は、優柔、不、断、の、極み、だ、ね」

「また読んだ……いや、知ったのか。ああそうだよ。」

こちらら紫様達に黙って動くのは一大決心なんだ。そう易々と決められるか」

「そ、うか、い」

興味の薄そうな返事。

そのうち暗吾さんは、知恵の輪を俺に向けて投げ捨てた。

「準備、が、出来、た、なら、行こ、うか。」

向こう、は、無限、の、時間、が、ある、けれ、ど、こちら、は、限ら、れた、時間、し、か、ない、から、ね」

暗吾さんの不老不死を意識した発言。正直全然上手くない。

「心も体も明日の着替えも、全部準備出来てるよ。行こうぜ」
「そ、うか、い」

暗吾さんは。

やはり、興味の薄そうな返事だった。

迷いの竹林。その中に永遠亭はある。

幻想郷随一の医療センターであるそこは、救急患者には迷惑な立地だった。

「道、に、迷っ、た……」

「……ここ、出入り口だよな」

入った場所に帰ってくると言うのは、迷いの竹林のせいなのだろうか。

はたまた隣の継ぎ接ぎ野郎のせいなのか。

「案内は任せてとか言ってたくせに、この方向音痴」

「違、う、よ、迷い、の、竹林、の、せい、さ。」

それと、君、は、もう、少し、他人、に、遠慮、しな、さい」

「知った事が……ん？」

本日三回目の出入り口に、目の前に白いワンピースの女の子がいた。ただし、頭にウサミミが生えている。

「確かあいつは……因幡てゐ？」

幻想郷縁起には人を幸運にする兎詐欺って書いてあったな。

……兎詐欺？

「あ、彼女、なら、永遠、亭の、場所、を、知って、る、ね」

「捕獲するか？」

「……まあ、いいん、じゃ、ない？」

そつか……なら。

「兎狩りじゃー！」

「うさ!？」

俺は無角棒を構えながら突撃した。

「……やっぱり、止める、べき、だった、か、な」

後ろの暗吾さんの声は聞こえない事にした。

「幸運だなあ」

「そう、だね。幸運、だ、ね」

「てゐを拉致つても許されちゃうんだもんなあ」

「幸運、だね」

悪戯兎詐欺を連行して強制的に道案内をさせた俺達。
今は、永琳さんから差し出されたお茶を飲んでいる。

「じゃ、あ、改め、て、自己、紹介、を、しよう。

私、は、南昌、暗吾。永夜、異変、直後、に、幻想、入り、し、
た、人間、さ」

「八意永琳よ。よろしく、毛玉さん」

「はは、正、面、から、言われ、た、の、は、初めて、だ」

言って快活に笑う暗吾。

でも他人から見たら気味の悪い笑い方にしか聞こえない。
本人はちゃんと笑ってるつもりなんだろうけど……。

「で？ あなたは？」

永琳さんがこちらに聞く。

「八雲橙の式、緑です」

「……ふーん、八雲のねえ」

永琳さんは怪訝そうな顔でこちらを見る。

「あの、うちの主が何か粗相を……？」

「……何でもないわ、貴方知らなそうなもの」

お茶菓子を食べる永琳さん。

異変解決時のやりとりで何かあったのだろうか？

「それで、用件なんですけど……」

隣でいきなり眠り始めた暗吾氏をよそに、

俺は自分の願望を伝える。

強くなりたい、と。

「あの……いいでしょうか……？」

俺は粗相の無いよう返答を待す。そんな俺をジッと見る永琳さん。
その視線は、何かを待っているようにも見えた。

しばらく黙っている永琳さん。

「……そろそろね」

なにがそろそろなのかはわからないが、永琳さんの答えは

「条件があるわ」

まあまあ嬉しい答えだった。

「その条件とは……？」

俺は永琳さんに聞く。

バタッ

「……え？ 暗吾さん？」

しかし、答えを聞く前に暗吾さんが突然倒れた。
俺は急いで脈を測る。

「……息はあるな。寝てるだけ……ゴパア！」

安心したのもつかの間、今度は俺の身体に異変が起きる。

「な、何が……！」

「条件を説明してあげるわ」

永琳さんが口を開く。

その口調から焦りなどは全く感じられない。

どうやら俺達は、謀られたらしい。

「そのお茶の薬に耐え切れたらね」

気絶する間際、朱色の髪のお姉さんが手招きしてるのが見えた。

第十幕：身勝手な行動（後書き）

原作では橙は月に行ってません。
気になる方は原作を買ってください。

第十一幕：永遠亭

「不幸だなあ」

「そう、だね。不幸、だ、ね」

「てゐを拉致つて許されるわけないもんなあ」

「不幸、だね」

身から出たサビなんて言葉は知らない。

自業自得も知らない。

悪戯兎詐欺の名で通る因幡てゐを連行し、強制的に道案内をさせた俺と暗吾（連帯責任）。

俺達は薬師、八意永琳の能力で制裁を受けていた。

「薬師だからって毒薬盛るとか……」

「君、の、は、トリ、カブト、だ、から、ね……」

暗吾さんの冷静な台詞に思わず血の気が引く。
トリカブトって……猛毒の代名詞じゃないか！

「逆になんで俺死んで無いんだ……？」

「そこは私の腕の見せ所よ」

倒れ込む二人の前で素晴らしいドヤ顔を見せる永琳さん。
うぜえ。

誰だ、この人を良識のある奴と言ったのは。

自分を棚に上げた発言だった。

俺がこんな状態でなければ間違いなくブッパしている。

「まあ、意識はあるようだし、正式に戦術を教えてあげるわ」
「これで却下されたら真空放電が炸裂するぞ……」

まあ、結果オーライという事で割り切ろう。

「あ、せめてもう一眠りさせてください……！」

胃の中がグルグルしてるから。

やば、また戻しそう……！

許可が取れたと思ったらすぐに暗吾さんは帰っていった。
実に薄情である。

そして翌日。

「TVの前のみんなー！ えーりんのパーフェクト化学教室、始まるよー」

「何とち狂った事言ってるのよ、てゐ」

何だろうそのフレーズ、歌い出したくなってくる。

「はいはい、お喋りはここまでにして。緑君に電気のあるこれを教えるわよ」

「「「はい」」」

というわけで。

永琳さんの授業が始まった。

ここでひとつ、永琳さんの紹介をしよう。

八意永琳。（下二桁↑ここ重要）17歳。

月の頭脳と呼ばれたほどの天才。元月の住民で輝夜姫の従者。永遠亭でのヒエラルキーはトップ。

彼女は授業内容を話した。

「まず、何が出来るか確認しましょうか。うどんげ、彼と弾幕ごっこをしてちょうだい」

「わかりました」

ウサミミブレザーが返事をする。

この人も紹介するか。

彼女の名は鈴仙・優曇華院・イナバ。皆からは鈴仙。イナバ。うどんげ。

果てには何故か座薬と呼ばれている。……本当に何故？

永遠亭でのヒエラルキーは低め。

本人曰く、言う事聞かない兎詐欺のせいで実質最下位らしい。

「鈴仙 MAKE RO！ 鈴仙 MAKE RO！」

隣でボンボンを持ちながらはしゃいでる兎詐欺が一匹。

この兎も一応紹介しておこう。

この口リ兎詐欺は因幡てゐ。人を騙するのが好きな兎詐欺だ。彼女の賽銭箱にお金を入れると本当に運が良くなる。

どうせ入れるなら博麗よりこっちに入れよう。

え？ 兎詐欺の文字が違うつて？

幻想郷じゃこれがデフォルトなんですよ。

それにしても弾幕ごっこか……。

スペルカード二枚しかないんだよなあ……。

借物は移動用だし。

「てゐは緑に幸運が行かないようにここから出て行って」

「わかりま……せん」

てゐが永琳さんに逆らう。

永琳さんが薄くイライラしてるのが見て取れた。

そんなに鈴仙を負かせたいか。

因みに鈴仙の呼称だが、俺とてゐは鈴仙、永琳さんはうどんげ、輝

夜姫はイナバと呼んでいる。

ぶつちやけ輝夜姫は兎全員をイナバと呼んでいるらしい。

……名前ぐらい覚えてやれよ。

程なくしてそんな会話も終わり、いよいよ本格的な修行に入った。

永琳さんが示した勝利条件は、鈴仙を五秒足止め出来れば勝ちというもの。

俺としては、相手に電流を流せば十秒くらい確実に
体の自由を奪う事が出来る自負が会ったので正直舐めてるのかと感じた。

「じゃあ、始めようぜ。鈴仙！」

「来なさい。ケチヨンケチヨンにしてあげる！」

それが思い上がりと知るのは、ほんの数秒後。

「狐と猫と隙間の式……いやさ、神隠しの共犯、緑！」

「狂気の月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバ！」

冷たい風が吹く竹林の中、弾幕ごっこが始まった。

「雷符『天鳴万雷』！」

始まった瞬間、俺はスペルカードを宣言する。
周囲が真空放電を起こし、雷雲が立ちこめる。

「早速くたばれえ！」

そして鈴仙に向けて落雷を放つ。
実にワイルドな弾幕だ。

対して、鈴仙は

「……視えた！」

そう言つて目を赤に染めた。

その瞬間、落雷の軌道が大幅に逸れる。
余波で竹が焼け焦げ、何本かは折れて倒れた。

「なっ……！　どうなっただよ！？」

「波長を操作したのよ。あんたの攻撃は私には届かないわ！
さあ、今度はこっちの番よ！」

鈴仙がスペルカードを取り出す。
潰しは……そうだ、反則だ。

俺は大きく後退して宣言を待つ。

「狂符『^{ヒシヨナリチューニング}幻視調律』！」

宣言された瞬間、鈴仙と俺の間に魔方陣が展開される。
その魔方陣は横に移動しながら弾幕を放った。

「……はっ！　この程度なら！」

簡単に避けられる。

そかし、それは愚かな勘違いだった。

「消え、た？」

突如、全ての妖力弾が消えたのだ。

驚いて立ち止まっていると、今度は目の前に妖力弾が迫っていた。

「なっ！　……くそったれがあ！」

俺はギリギリの所で無角棒を取り出し、周辺の妖力弾を叩き消し始める。

しかしその内叩き落とせる弾幕の量が減っていき、徐々に身体に傷

が出来始める。

防戦一方。

そう言い表すしかなかった。

「いい加減に……しやがれ！」

俺は今度は自分を基点にして球状の真空放電を放ち、周囲の弾幕全てを一気に相殺する。

「はあ……はあ……」

ある程度の弾幕は消せたが、まだスペルブレイクはしていない。

鈴仙は俺の様子を見て、顔を綻ばせる。

「ふん、もうお終いなのか？　ならこれでトドメよ！」

その言葉と共に、また全ての妖力弾が消える。

「またか……！」

落ち着け、冷静になるんだ俺！

ヒントはあるんだ、打開策だって思いつくはずだ！

俺は再び実体化した弾幕を無角棒で叩き潰す。

「……そうだ、接近戦！」

無角棒なら、攻撃は可能だ。

弾幕ごっこで接近戦は禁止なんてルールは無かった筈。

「……電気の応用、か……」

そしてもう一つ、思いつく戦法。

可能と言えば可能だが、初めての試みだ。

下手をすれば二度と足が動かなくなるかもしれない。

しかし、不思議と恐怖は無い。

俺は迷わず、足に電気を纏わせた。

「電気による肉体強化……！」

鈴仙が弾幕を強くする。

それを見て尚、俺は立ち止まらずに走る。

無角棒で弾幕を防ぎ、紙一重で躲し、時には体当たりして真っ直ぐ進む。

「な、何て無謀なの……？」

鈴仙が驚愕と呆れの声を上げる。

その時、僅かに隙が出来る。

俺は無角棒に全力で霊力を込めた。

無骨な一本の棒は、禍々しい形の鎌となった。

「これが、俺の性質……」

一瞬引いたが、隙を作ってしまうのは避けた。

俺は腕に電気を纏い、振り上げる力を強くする。

その時だった。

「そこまで。もう十分だわ」

永琳さんの制止の声が聞こえたのだ。

「十分緑君の底が解ったわ。これで強化プランが練れるわ。
優曇華、今日はもういいから明日にしましょう」

「わかりました、師匠」

鈴仙は構えを解く。

それに合わせて、俺も無角棒を仕舞う。

その時だった。

「すまん……ちょっと疲れ……た……」

俺の視界が急激に揺らいだのだ。

極度に疲弊していたつもりはなかったが、身体はそう思っていないらしい。

俺は地面に倒れ込んだ。

負の第三幕：予定変更

まさか緑がすぐにあいつに会うなんてねえ。
もう少し後かと思ってたけど、なかなかどうして都合良くいかない
じゃないか。

これは思った以上に早く動く必要があるね。
さて、どう策を練った物が……。

能力を使えば全てが上手くいくだろうけど、それでは面白くない。

最初から最強の状態で遊ぶRPGに何の魅力があるのか。
適度な難易度があるから遊びは面白いというのに。

人生の最初からチートだった僕だからこそその価値観だ。
凡人には絶対解らないよね。

おっと、そんな事はどうでも良かったね。

それにしても策が浮かばない。

八雲紫を出し抜き、南昌暗吾を屈服させ、最後に緑を消し去る方法。

そうだな……あいつもここに呼べばいいのかな？
僕としてはあいつに会いたくないけど、僕の手足になってくれるの
も事実だし。

いやはや、僕は神様に愛されてるねえ。

こんな素晴らしい能力を授けてくれたんだから。

チートにも、攻略本にも、リセットボタンにもなるこの能力。
それでは久しぶりに使おうとしますか。

??? 『メメがここにくればいいのに』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8608t/>

東方雷電記 ~ Light to come off in a fantasy ~

2011年10月18日10時01分発行